Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies,
Showa Women's University, 2024, Vol. 26, 49-60.

論　文

# インターネット上での行動内容が社会性に及ぼす影響
## ― Twitter 上での行動に注目して ―

高舘　七海・田中　奈緒子

# Impact of Online Behavior and Attitudes on Sociability: Analysis of Twitter Use

Nanami TAKADATE and Naoko TANAKA

This study explores the influence of the sense of Ibasho (a feeling of belonging) in real-life situations and Twitter-based interpersonal behaviors on sociability. University students and working adults who use Twitter ($N = 191$) participated in an online survey. The survey assessed perceptions of interpersonal behavior and changes in sociability since beginning Twitter use. Analysis revealed Six factors: "gaining a sense of belonging," "immersion or dependent involvement." "prosocial behavior," "rejecting relationships," "supporting social contributions," and "aggressive posting" on Twitter. Covariance structure analysis of these variables indicated a restrained link between the lack of real-life sense of 'Ibasho' and "gaining a sense of belonging" on Twitter. Conversely, in real-life contexts, such a lack was associated with "dissolving relationships" and modestly linked to "self-assertion." These findings suggest that individuals who perceive a deficiency in real-life social settings may be less inclined to form new interpersonal relationships and instead could resist relationship-building on Twitter.

*Key words : behavior and attitudes on Twitter（Twitter上での行動内容）, sociability（社会性）*
*sense of 'Ibasho'（居場所感）*

## 問題と目的

日本におけるインターネットの歴史は1994年の個人向けインターネットフル接続サービスから始まり、2004年にmixi、GREEが、2008年にはTwitter[1)]、2010年にはFacebookが登場したことによってインターネット上でのコミュニケーションは一気に身近なものとなった。SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の発展はめざましく、2016年には主要SNS（LINE、Facebook、Twitter、mixi、Mobage、GREE）のいずれかの利用率は71.2％になり、特に20代では97.7％がいずれかのSNSツールを利用している（総務省，2017）。

SNSとはオンラインでのコミュニケーションにおいて多く使われているツールであり、ソーシャルメディアの内の一つの構成要素である。ソーシャルメディアとは「ブログ、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）、動画共有サイトなど、利用者が情報を発信し、形成していくメディア」と定義され、「利用者同士のつながりを促進する様々なしかけが用意されており、互いの関係を視覚的に把握できるのが特徴」とされている（総務省，2017）。ソーシャルメディアの中でもSNSの利用は多く、インターネットで利用した機能・サービスについての調査（総務省，2018a）による利用率をみると、最も高いLINEが約60％、次いで情報・レビュー共有サイト（約47％）、Facebook（約41％）、Twitter（約40％）の順であり、また、積極的な情報発信や発言を行う機能・サービスについてはLINE（17.0％）、Twitter（7.7％）、Facebook（5.3％）の順となっている。このようにコミュニケーションの手段として多く用いられているSNS

は様々な形態を持っており、大きく「広場型」「フィード型」の2つに分類することができる。広場型とは、運営者がインターネット上に開設したコミュニケーションの場に参加者が特定のテーマに関連する情報を投稿するというものであり、投稿された情報に人々が集まるようにして人間関係が作られていく。これには、レビューサイトや掲示板、ブログ、mixiなどが該当する。一方、フィード型は参加者が投稿する情報が一覧となって表示され、参加者同士のやり取りによって人間関係が作られていく。これにはLINEやTwitter、オンラインゲーム、Facebook、Instagramなどが該当する。フィード型のソーシャルメディアは近年急速に普及したツールと言える。また、LINEやFacebookは現実での友人や職場の同僚など“既存の知人”とのつながりとして活用される側面が強い一方、Twitterやオンラインゲームは共通の趣味や関心などを持つ“遠くのだれか”とのつながりを持つことが出来るという側面がある。

インターネット上での対人関係と対面場面での対人関係において、最も大きな違いは匿名性である。インターネット上の対人場面における匿名性の効果について佐藤・吉田（2008）は、自己の匿名性は相手への不安感を低減させることによって自己開示抵抗感を減少させ、他者の匿名性は親密感が減少し自己開示の内容も浅くなることを示している。ここから、インターネットは自身のことを発信していく場として有用である一方で、人間関係の形成という点では表面的な関係は形成できるが親密な関係は形成しづらいと言えるだろう。

次に対人関係の質の違いについて孤独感に注目して述べていく。孤独感とは、個人の社会的相互作用の願望レベルと達成レベルの間の不一致から生じる不快な個人的経験と定義され（工藤・西川，1983）、個人が望むような社会的なつながりが得られないときに生じる。こうした孤独感を解消するには対面コミュニケーションによって新たな社会的つながりを得る必要があるが、対面場面における対人関係の構築は多くのコストがかかり困難である場合も多い。しかし、インターネット上であれば距離や時間の制限なく様々な人々とかかわりを持つことが可能である。三浦他（2009）は、匿名性の高い状況では、共通の趣味や関心などを持つ者との接触は所属感を感じさせ、親密な関係の構築に繋がっていると示唆している。実際にインターネット上での対人交流は孤独感を軽減させ得るのだろうか。五十嵐（2002）はインターネット上での対人関係は、非言語的手がかりが伝達されず主に言語的手がかりによってコミュニケーションが行われるため、自身のポジティブな態度を伝えることが難しいことを指摘し、そのため、相手との親密さも深まりにくく、孤独感を低減させるような関係を形成できないと述べている。また、インターネット上での対人関係は対面場面での対人関係がすでに形成・維持されていることを前提としたものであり、対面場面での対人関係の代替というよりも、むしろ補強的な役割を果たしていると示唆した。これはインターネット上での対人関係には孤独感を軽減させる効果がないことを示唆する。

では、インターネット上での対人関係を築くことには意味はないのだろうか。対人場面において適切な反応をするために必要な能力や行動である社会スキルを取り上げてみよう。社会スキルの概念は非常に幅広いが、ここではライフスキルと社会的自己制御を用いて社会性をとらえることとする。ライフスキルとは「効果的に日常生活を過ごすために必要な学習された行動や内面的な心の働き」と定義される（島本・石井，2006）。社会的自己制御とは、社会スキルの中でも自己統制の側面をとらえる概念であり、「社会的場面で，個人の欲求や意思と現状認知との間でズレが起こった時に，内的基準・外的基準の必要性に応じて自己を主張するもしくは抑制する能力」と定義される（原田他，2008）。これら2つの概念から本研究では、社会性を「対人場面において関係を円滑に形成・維持するための適切な行動をとれること」と定義する。

インターネットの利用と社会性との関連に関しては多くの研究がされている。坂元他（2000）は、MUD（multiuser dungeon: インターネット上の仮想空間における複数のユーザーの相互交流の場）による仮想コミュニティでの社交的な行動に注目し、シャイネス傾向の高い女子大学生を対象に実験を行い、現実生活での社会性への影響を検討し、インターネット上での社交的なふるまいが現実生活での社会性を向上させることを示した。一方、高比良他（2006）は、中学生を対象にイン

ターネット使用量と攻撃性の関連を検討し、インターネット使用量が多い者ほど、他者への敵意的認知および言語的攻撃性が高いこと、特に敵意的認知が促進され、現実生活での社会性を抑制することを示した。このようにネット利用による社会性への影響は抑圧・促進のどちらも指摘されており、それに対する一つの解としてKraut et al.（2002）の、Rich get richer model（以下RGR model）があげられる。Kraut et al.（2002）はネットの利用による影響と現実生活での社会との関係を検討し、ソーシャルサポートを多く受けている、もしくは外向的な者がネットを利用した場合は、家族や友人との関わりの促進や孤独感の低下など、ネットの利用によって良い影響がもたらされること、その一方でソーシャルサポートを受けていない、もしくは内向的な者がネットを利用した場合は社会的関与の減少など、ネットの利用によって悪い影響がもたらされることを示し、社会的資源があり現実生活において良好な対人関係を持つ者はネットの利用を通じて社会との関わりをより良くすることが出来るというRGR modelを提示した。このRGR modelを受けて、藤・吉田（2009）は現実生活での社会とのかかわり方がネット上での行動を媒介して、ネット利用の社会性・攻撃性への影響を方向づけるという「現実社会での居場所のなさ→インターネット上での行動内容→現実生活における社会性・攻撃性への影響」というモデルを提言した。藤・吉田（2009）はインターネット上での行動内容を規定する社会との関わり方とは、「周囲の社会の中で孤立し疎外されており、自分の居場所がないように感じる」という「居場所のなさ」であると想定し、ブログ利用者およびオンラインゲーム利用者への調査を行い、その結果、インターネット上での攻撃的行動が他者への否定的な態度である敵意的認知を高め社会性を抑制すること、一方でインターネット上における所属感獲得が、現実世界での社会性の促進に影響を与えることを示し、親密な集団内での相互作用が社会的訓練の役目を果たすことで、現実生活にも応用可能な対人スキルの学習につながっているとした。つまりインターネット上での対人場面での振る舞いが現実生活における社会性に影響を与えていると考えるのである。

そこで、本研究ではインターネット上における対人場面での行動に注目し、社会的行動である向社会的行動と反社会的行動である攻撃行動、インターネット上での所属感の獲得に焦点を絞り検討する。また、社会性への悪影響が指摘されているインターネットへの依存的関与についても取り扱う。

向社会的行動とは、「外的な報酬を期待することなしに、他人や他の人々の集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとする行為のこと」と定義されている（鈴木，1992）。向社会的行動は他人との気持ちのつながりを強めたり、それをより望ましいものにしたりしようとする場合にとられる行動であり、深いつながりを持つ人間関係を構築・維持している（菊池，1998）。インターネット上での向社会的行動について、宮田（2005）は「情報・知識、および感情の伴ったサポートのどちらかもしくは両方ともの提供」であるとし、その動機として情報・知識の提供によって自身もより良いものを得られるといった互酬性への期待、所属意識、友人や自分と似た人への共感から生まれる関心、自己への高評価、資源提供自体を自らの楽しみとするコンサマトリー性、の5つをあげた。インターネット上での向社会的行動は利他・利己どちらの動機も含まれているが、SNSなど、より分かりやすく自身への評価が視覚化されたツールでは利己的な動機が優位となることが予想される。

一方、攻撃行動とは、Krahé（2001）が「どんな形であれ、危害を避けようとする生活体に対して、危害を加えようとしてなされる行動である」と定義しているが、インターネット上での攻撃行動は対面場面と違い、直接接触するような身体攻撃などはできないため行動の選択範囲は異なる。またインターネットという環境には攻撃行動を促し、なおかつ長期化させる特徴がある（Wallace, 2016）。インターネットの匿名性と攻撃対象との物理的距離は攻撃者に報復されないだろうという安心感を与え、脱抑制効果を与える。また、インターネット上の攻撃的な発信は、オーディエンスによるリツイートや再投稿などによって簡単に拡散される。そしてその情報は完全に削除されることはなく記録としていつまでも残り続けるため永続的である。インターネット上では初めから悪意を持って他人を傷つけようとしている人物でなく

ても、こうした特徴が攻撃行動を取りやすくしており、だれでも攻撃行動を取りうると言える。

オンライン・コミュニティは、共通の趣味や関心テーマのもとにメンバーが集まり交流を行う場であり、共仲間意識や集団意識など所属感を獲得しやすいと推察される。このインターネット上での所属感の獲得に関して、藤・吉田（2009）はインターネット上における所属感の獲得が現実生活における家族・友人との関係を良好にする影響を持つことを示した。これによりインターネット上での所属感の獲得が現実生活における社会性を促進させる可能性が示唆されている。

最後に社会性に大きな影響を与える要素としてインターネットへの依存について取り上げる。「インターネット依存」という言葉は近年特に注目されるようになった用語だが、明確な定義はない。利用時間の長さはある程度の目安となることが考えられるが、インターネット利用が生活の一部となっている現代においては一概に長時間利用は依存であるとは言えない。インターネット依存について考えるうえで参考となるのが2018年にICD-11において発表された「ゲーム障害」の診断基準である。ICD-11のゲーム障害の診断基準は「制御困難」「優先度の高さ」「否定的な問題にもかかわらず使用・エスカレート」をすべて満たし「重大な障害」をもたらすこととされ、「嗜癖行動による障害」に分類される。ゲーム障害はオンライン・オフライン問わずゲームに焦点を当てたものだが、ゲームのみの問題ではなく動画やSNS、ボイスチャットなど他のインターネットツールも併用していることが考えられ、インターネットの依存について考えるうえで参考となる知見である。インターネットの使用による悪影響は多くの研究から指摘されており、社会性を抑制する要因の一つであると言えよう。

以上を踏まえ、本研究ではRGR modelに基づく藤・吉田（2009）を参考に現実生活での居場所のなさがインターネット上の行動を介し現実生活での社会性に与える影響について検討することを目的とする。その際、インターネット上での対人行動に注目して検討を行うためオンラインコミュニケーションツールであり、共通の趣味や関心によって“遠くのだれか”と人間関係を構築できるTwitterに焦点を当てる。インターネット上での行動としては向社会的行動と攻撃行動、インターネット上での所属感の獲得をとりあげる。

本研究の仮説は以下の２つである。

仮説１：現実生活での居場所のなさはTwitter上での対人行動を介して社会性に抑制的に影響するだろう。

仮説２：Twitter上での向社会的行動が現実生活での社会性の向上に影響するだろう。

## 方　法

### 調査対象及び実施時期

2020年８月から10月にかけて、都内の４年制大学生及び社会人の男女191名（男性24名、女性167名、平均年齢は21.39歳）を対象に調査を行った。

### 調査方法

WEBアンケートによる質問紙調査を行った。WEBアンケートはオンラインアンケート作成ツールであるSurveyMonkeyを使用し作成した。調査の依頼の際には、アンケートの趣旨、回答する上での注意事項、アンケートサイトのURLとQRコードを記した紙を配布した。注意事項には、回答は任意であることや回答によって個人情報を収集されることはないことを記し回答をもって調査協力への同意とみなした。

なお、本研究は、昭和女子大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号20-21）。

### 調査内容

１．属性として、Twitter利用頻度、年齢、性別、職業（学生か社会人）を尋ねた。

２．Twitter利用後の対人スキルの測定12項目：日常生活スキル尺度（島本・石井, 2006）のうち、主に対人場面で展開されるスキルを表す対人スキルの４因子である親和性、リーダーシップ、感受性、対人マナーの各項目を用いた。その際Twitterを利用した後の変化を測定するため、教示文において、「Twitterを利用するようになってからのあなたについて…」と問うと共に、各項目の文末を「…ようになった」と修正した。「あてはまる（5）」「ややあてはまる（4）」「どちらでもない（3）」

「ややあてはまらない (2)」「あてはまらない (1)」の 5 件法で回答を求めた。

3．Twitter利用後の社会的自己制御の測定17項目：Social Self-regulation尺度（原田他，2008）のうち、項目数を抑えるため因子負荷量の低い（.40以下）5 項目を除き、「自己主張」「感情・欲求抑制」因子の項目を用いた。その際Twitterを利用した後の変化を測定するため、教示文において、「Twitterを利用するようになってからのあなたについて…」と問うと共に、各項目の文末を「…ようになった」と修正した。「あてはまる (5)」「ややあてはまる (4)」「どちらでもない (3)」「ややあてはまらない (2)」「あてはまらない (1)」の 5 件法で回答を求めた。

4．現実生活における居場所のなさの測定 2 項目：藤・吉田 (2009) と同様の項目を用いた。「あてはまる (5)」「ややあてはまる (4)」「どちらでもない (3)」「ややあてはまらない (2)」「あてはまらない (1)」の 5 件法で回答を求めた。

5．Twitter上での行動内容の測定：インターネット上での行動内容（藤・吉田，2009）から、「他者との関係に関する行動」のうち「所属感獲得」9 項目を、「現実とのバランスに関する行動」のうち「没入的関与」4 項目と「依存的関与」4 項目を用いた。「あてはまる (5)」「ややあてはまる (4)」「どちらでもない (3)」「ややあてはまらない (2)」「あてはまらない (1)」の 5 件法で回答を求めた。

6．Twitter上での攻撃行動の測定11項目：磯部・菱沼 (2007) の外顕性攻撃と関係性攻撃からなる攻撃性尺度を参考に、Twitter利用者による聞き取り調査を行って独自に作成した。「あてはまる (5)」「ややあてはまる (4)」「どちらでもない (3)」「ややあてはまらない (2)」「あてはまらない (1)」の 5 件法で回答を求めた。

7．Twitter上での向社会的行動の測定12項目：菊池 (1988) を参考に、Twitter利用者に聞き取り調査を行って独自に作成した。「いつもした (5)」「しばしばした (4)」「数回したことがある (3)」「1 度したことがある (2)」「したことがない (1)」の 5 件法で回答を求めた。

## 結　果

### 有効回答者

回答データのうち、Twitter利用者の回答を分析対象とした。Twitter利用者は176名（男性21名，女性155名，平均年齢21.43歳，$SD = 2.43$）で全回答者の92.15％であった。

### Twitter上での行動内容の因子分析

Twitter上での行動についてその構造を検討するために、Twitter上での向社会的行動測定項目（12項目）、Twitter上での攻撃行動測定項目（11項目）、Twitter上での行動内容測定項目（17項目）の計40項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。各項目のうち、因子負荷が0.35 に満たなかった項目および複数の因子に対して0.35 以上の因子負荷を示した 4 項目を削除し、再度因子分析を行い 6 因子解を採用した。因子パターンと因子間相関、信頼係数をTable 1に示した。第 1 因子はTwitter上での行動内容の「所属感獲得」因子と同じ項目で構成されたため「所属感獲得」（$\alpha = .89$）と、第 2 因子はTwitter上での行動内容の「没入的関与」と「依存的関与」の 2 つの因子項目によって構成されたため「没入・依存的関与」（$\alpha = .87$）と、第 3 因子はTwitter上での向社会的行動尺度の多くの項目が含まれていたため「向社会的行動」（$\alpha = .87$）と、第 4 因子はTwitter上での攻撃行動尺度の項目より構成されていたため「攻撃的投稿」（$\alpha = .68$）と、第 5 因子はTwitter上での攻撃行動尺度の項目より構成されていたため「関係の拒否」（$\alpha = .70$）と、第 6 因子はTwitter上での向社会的行動尺度の項目の一部でありその内容から「社会貢献活動の応援」（$\alpha = .75$）とそれぞれ命名した。

因子ごとに項目の回答得点を加算し、項目数で割った値を尺度得点とした。5 つの下位尺度の $\alpha$ 係数は.68～.89となっており、ある程度の内的一貫性が確認された。

### 日常生活スキル尺度の因子分析

日常生活スキル尺度について得点分布を確認したところ、一つの項目で得点分布に偏りが見られたが、日常生活スキルを測定する上で不可欠な項目であると判断したため除外せず、全ての項目を

**Table 1**
Twitter上での行動の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

| 項目内容 | | 因子 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | *F*1 | *F*2 | *F*3 | *F*4 | *F*5 | *F*6 |
| **第１因子：所属感獲得（α＝.89）** | | | | | | | |
| C5 | 簡単に友人関係をつくることができる | **.81** | -.17 | -.04 | -.11 | .01 | -.05 |
| C8 | 自分のことを認めてくれる相手と出会うことができる | **.79** | -.11 | -.01 | .00 | .19 | -.06 |
| C2 | グループの一員として、自分を迎え入れてもらいやすい | **.68** | .03 | -.05 | .15 | .10 | .01 |
| C6 | 表面的ではない人間関係を結ぶことができる | **.67** | -.01 | .02 | .08 | -.02 | .08 |
| C1 | 『自分には仲間がいる』という安心感が得られる | **.65** | .02 | .09 | .08 | .04 | -.13 |
| C3 | 集団の中で、仲間意識を感じることができる | **.58** | .15 | .06 | .01 | -.14 | .12 |
| C9 | 緊張せずに、他の人と会話ができる | **.56** | .12 | .00 | -.12 | -.15 | .07 |
| C7 | 気楽に話をして楽しむことができる | **.53** | .12 | .06 | .04 | -.05 | .00 |
| C4 | ネット上には、自分の居場所があると感じられる | **.52** | .26 | .10 | -.01 | .04 | -.13 |
| **第２因子：没入･依存的関与（α＝.87）** | | | | | | | |
| C15 | ネットができなくなったら、きっと耐えられないと思う | .08 | **.81** | -.01 | -.14 | -.06 | .00 |
| C17 | 可能ならば、ずっとネットをしていたい | -.01 | **.78** | -.05 | -.09 | .06 | -.07 |
| C14 | ネットができない状態が続けば、イライラしてくるだろうと思う | -.04 | **.75** | .02 | -.01 | -.02 | .12 |
| C13 | ネットにのめり込むことで、日常生活を忘れてしまえる | -.10 | **.75** | -.03 | -.11 | .10 | .01 |
| C10 | ネットの世界の方が、生きてるという実感が感じられる | .20 | **.64** | -.16 | .10 | -.01 | .00 |
| C12 | 普段の自分の生活と比べると、ネット上の活動のほうがずっと楽しいと思える | .15 | **.62** | .07 | -.01 | -.10 | -.08 |
| C16 | 他にしなくてはならないことがあっても、ついついネットをしてしまう気がする | -.05 | **.56** | -.05 | -.06 | .16 | .13 |
| C11 | ネットと日常の境目が、あいまいになることがよくある | .09 | **.37** | -.09 | .14 | .23 | .11 |
| **第３因子：向社会的行動（α＝.87）** | | | | | | | |
| A8 | 誕生日の人にお祝いのコメントを送る | .00 | -.09 | **.85** | -.17 | .06 | -.02 |
| A9 | 喜んでいる人の投稿にお祝いのコメントを送る | .11 | -.12 | **.81** | -.08 | -.01 | -.02 |
| A7 | 入学式や卒業式の投稿に対してお祝いのコメントを送る | -.05 | -.13 | **.74** | .08 | -.10 | .06 |
| A2 | 困っている人のために助けになるような関連情報を教えてあげる | .06 | .05 | **.66** | .11 | -.18 | .05 |
| A1 | 困っている人に助言をする | .08 | .02 | **.65** | .04 | -.06 | -.08 |
| A10 | 喜んでいる人の投稿に “いいね” する | .05 | -.15 | **.59** | -.16 | .32 | .11 |
| A12 | 創作物の投稿に対して好意的なコメントをする | -.05 | .27 | **.54** | -.02 | -.12 | .05 |
| A11 | 創作物の投稿に対してリツイートする | -.03 | .27 | **.49** | -.03 | -.07 | .17 |
| A5 | 交通事故や電車の遅延情報などの情報を投稿する | -.08 | .00 | **.38** | .30 | .03 | .06 |
| **第４因子：攻撃的投稿（α＝.68）** | | | | | | | |
| B3 | どんな状況でも、相手に対して誹謗中傷的内容の投稿はしない | -.05 | -.09 | -.01 | **.86** | -.12 | .03 |
| B2 | どんなに腹が立っても、相手に怒りをぶつけたり否定的なコメントを送るようなことはしない | .16 | -.23 | -.16 | **.61** | -.11 | .18 |
| B6 | 気に入らない人について良くないうわさを見かけたとき、そのうわさを自分もツイートもしくはリツイートする | .00 | .04 | .09 | **.50** | .13 | -.02 |
| B5 | 腹を立てた相手の悪口を、ツイートする | -.16 | .24 | .17 | **.45** | .11 | -.31 |
| **第５因子：関係の拒否（α＝.70）** | | | | | | | |
| B8 | あまり好きではない人が関わってきても、気づかないふりをして、無視をする | .03 | .08 | -.29 | -.06 | **.79** | .15 |
| B9 | 付き合いがあってもあまり好きではない人には、新しく作成した非公開アカウントをわざと教えない | .03 | .07 | .16 | -.17 | **.58** | -.07 |
| B10 | あまり好きではない人が見る事ができないように、新しく非公開アカウントを作成する | -.16 | .22 | .12 | .10 | **.41** | -.07 |
| B11 | 気に入らない相手をブロックする | .04 | .04 | .22 | .16 | **.36** | .11 |
| **第６因子：社会貢献活動の応援（α＝.75）** | | | | | | | |
| A3 | 社会貢献活動をするアカウントの投稿に “いいね” をする | .00 | -.06 | .09 | .03 | .19 | **.76** |
| A4 | 社会貢献活動をするアカウントの投稿をリツイートする | -.04 | .21 | .10 | .11 | -.04 | **.69** |
| | 因子間相関 | *F*1 | .55 | .49 | .32 | .26 | .00 |
| | | *F*2 | | .58 | .43 | .47 | -.05 |
| | | *F*3 | | | .36 | .44 | .01 |
| | | *F*4 | | | | .21 | -.20 |
| | | *F*5 | | | | | -.14 |

注１：下線は逆転項目を示す。
注２：項目番号はTwitter上での向社会的行動測定項目はA1－A12，Twitter上での攻撃行動測定項目はB1－B11, Twitter上の行動内容測定項目はC1－C17を示す。

分析対象とした。各項目の関係性を探るため島本・石井（2006）に基づいた因子ごとに項目の回答得点を加算し、項目数で割った値を下位尺度得点として、各下位尺度間の相関を算出したところ（$rs$＝.35～.65）、中程度から強い正の相関が見られた。

そのため、日常生活スキル尺度12項目について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、固有値の推移（6.20, 1.53, .87…）および解釈可能性から1因子解を採用した（Table 2）。この因子を本研究では日常生活スキル尺度（島本・石井, 2006）のうち対人スキル項目を使用していることから「円滑な対人関係」と命名した。、十分な信頼性（$\alpha$＝.91）が確認されたため、合計得点を項目数で割った値を尺度得点とし、以後の分析に用いた。

### 社会的自己制御尺度

社会的自己制御尺度について原田・吉澤・吉田（2008）に基づき「自己主張」「感情・欲求抑制」を用いてIT相関を確認したところ、2項目が低かったため、これらの項目を除外し以降の分析を行うこととした。「自己主張」（$\alpha$＝83）、「感情・欲求抑制」（$\alpha$＝.59）となり、「感情・欲求抑制」がやや低い値であった。

### 現実生活での居場所のなさ

現実生活における居場所のなさの2項目の回答得点を加算し、項目数で割った値を下位尺度得点とした。信頼性（$\alpha$＝.75）は許容範囲であった。

### 尺度間の相関関係

以上の分析を踏まえて、尺度間の相関行列を示した（Table 3）。Twitter上での行動の下位尺度間では、「向社会的行動」とのみ弱い正の相関を示した「社会貢献活動の応援」を除き、他の6つの下位尺度は、互いに正の相関を示しており、「向社会的行動」と「攻撃的投稿」間も同様であった（$r$＝ .36, $p$<.01）。Twitter上で他者に対して「いいね」やリツイート、コメントなどの働きかけをする利用者は向社会的行動だけでなく攻撃行動も行うことが示されたと言える。同様に「没入・依存的関与」は他の4下位尺度と正の相関を示しており、Twitterへの没入感、依存感が高いほど、Twitter上では、所属感が高まり、向社会的行動のほか攻撃的投稿、関係の拒否など多様な行動を取っていた。

現実生活における社会性の下位尺度間では、相互に正の相関を示し、特に「円滑な対人関係」と「自己主張」との間にはやや強い正の相関がみられた。次いで、Twitter上での行動と現実生活における社会性の下位尺度間を見ると、Twitter上の「所属獲得」「向社会的行動」は、現実生活における「円滑な対人関係」「自己主張」と正の相関を示した一方で、Twitter上の「没入・依存的関与」「攻撃的投稿」「関係の拒否」が高いほど、

**Table 2**
日常生活スキル尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

| | | 因子負荷量 |
|---|---|---|
| **円滑な対人関係（$\alpha$＝.91）** | | |
| 7 | 困っている人を見ると援助してあげたいと思うようになった | .78 |
| 9 | 悲しくて泣いている人を見ると、自分も悲しい気持ちになるようになった | .78 |
| 8 | 他人の幸せを自分のことのように感じるようになった | .76 |
| 2 | 友人らが親身になって相談にのってくれるようになったと思う | .75 |
| 12 | 初対面の人に対しては言葉遣い等に気を配るようになった | .74 |
| 10 | 目上の人の前では礼儀正しく振る舞うことができるようになった | .70 |
| 11 | 年上の人に対しては敬語を使うようになった | .68 |
| 1 | 困ったときに、友人らに気軽に相談することができるようになった | .67 |
| 3 | どんな内容のことでも友人らと本音で話し合えるようになった | .66 |
| 4 | 話し合いのときにみんなの意見を1つにまとめることができるようになった | .60 |
| 6 | 自分が行動を起こすことによって、周りの人を動かすことができるようになった | .55 |
| 5 | 集団で行動するときに先頭に立ってみんなを引っ張っていくことができるようになった | .54 |

**Table 3**
下位尺度間相関　（$n$ = 136）

| | Twitter上での行動 | | | | | | 現実生活における社会性 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
| **Twitter上での行動** | | | | | | | | | |
| 1 没入・依存的関与 | - | | | | | | | | |
| 2 所属感獲得 | .57** | - | | | | | | | |
| 3 攻撃的投稿 | .39** | .31** | - | | | | | | |
| 4 関係の拒否 | .51** | .34** | .27** | - | | | | | |
| 5 向社会的行動 | .48** | .53** | .36** | .41** | - | | | | |
| 6 社会貢献活動の応援 | .14 | .12 | -.04 | .07 | .20* | - | | | |
| **現実生活における社会性** | | | | | | | | | |
| 7 円滑な対人関係 | .33** | .50** | .11 | .09 | .33** | .09 | - | | |
| 8 自己主張 | .08 | .35** | .05 | -.12 | .19* | .16 | .60** | - | |
| 9 感情・欲求抑制 | -.24** | -.05 | -.33** | -.22* | -.06 | .07 | .25** | .30** | - |
| **現実生活における居場所のなさ** | .10 | -.14 | .04 | .24** | .06 | -.08 | -.04 | -.12 | -.07 |

**$p$<.01，*$p$<.05

現実生活では「感情・欲求抑制」が低くなっていた。

### 共分散分析構造分析：Twitter上での行動内容の媒介効果

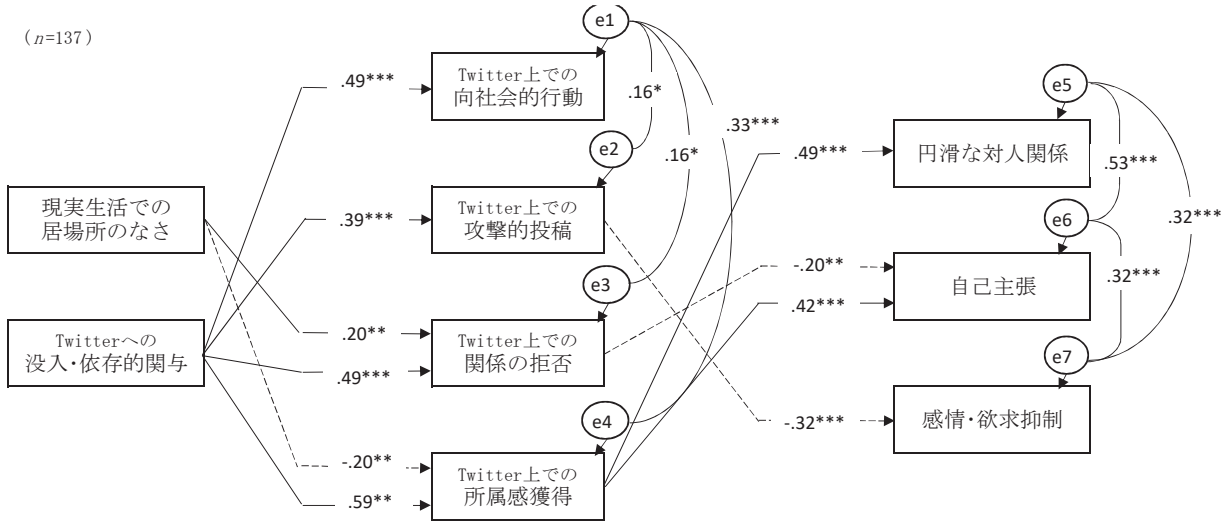
RGR modelおよび藤・吉田（2009）に基づき、現実生活における居場所感（居場所のなさ）がネット上での行動を媒介して現実生活における社会性に影響を与えるというモデルを想定し共分散構造分析を実施した。分析の結果、有意でないパスが見られたため、それらのパスを消去して再度分析した。その際、各因子について内容を吟味し、「没入・依存的関与」はTwitter上での行動ではなくTwitterの利用の傾向を示す因子であると考え、行動内容を規定する要因であると想定しパス図を作成した。また、「現実生活での居場所のなさ」と「没入・依存的関与」が現実生活における社会性に直接影響を与えている可能性も考慮し検討を行った。最終的なモデルの適合度は$\chi^2(20)$ = 21.70（$p$<.01），GFI = .97，AGFI = .92，CFI = 1.00，RMSEA = .03であり、高い適合度を示した為このモデルを採用した。Figure 1に有意なパスのみを記した結果を示した。

Twitter上での行動内容の媒介効果としては、Twitterへの「没入・依存的関与」は、Twitter上での「向社会的行動」「攻撃的投稿」「関係の拒否」「所属感の獲得」という4つの多様な行動に正の影響を示しており、「所属感の獲得」が高くなることで、現実生活での「円満な対人関係」や「自己主張」を高めるというポジティブな影響がみられた一方で、「関係の拒否」も高くなることで「自己主張」を低める、あるいは「攻撃的投稿」を高めることで「感情・欲求抑制」が低くなるというネガティブな影響も見られた。また。現実生活での居場所のなさは、Twitter上での「所属感の獲得」には負の影響を、「関係の拒否」には正の影響を示し、現実生活での「円満な対人関係」や「自己主張」が低くなるという影響を示した。なお、現実生活での「居場所のなさ」とTwitterへの「没入・依存的関与」から現実生活における社会性への直接的な繋がりは見られなかった。

## 考察と今後の課題

現実生活での居場所のなさはTwitter上での対人行動を介して社会性に抑制的に影響するという仮説1は支持されたと言える。現実生活での居場所のなさはTwitter上での攻撃行動のうち「関係の拒否」を介し、現実生活における社会性のうち「自己主張」に抑制的な影響を与えていた。「関係の拒否」とは自身にとって好ましくない相手との接触を断ち関係を解消しようとする行動であり、関係の維持・修復を行わずに対人関係そのものをなくすということであるため、Twitter上の対人関係は浅く狭いものとなるだろう。社会的自己制御における「自己主張」は個人の欲求や意思と現

**Figure 1**
共分散構造分析の結果




GFI = .965, AGFI = .921 CFI = .995,RMSEA = .025。有意なパスのみを記述した（$p$***<.001, $p$**<.01, $p$*<.05)。
実線は正のパス、破線は負のパスを示す。

状との間にズレが起こった時に必要性に応じて自己を主張する能力のことである（原田他, 2008)。人は対人場面において適切な自己主張を行うことで、集団内で自己を表現することが出来る。しかしTwitter上で「関係の拒否」を行う者は希薄な対人関係のあり方が学習され、現実生活においても自己主張を避けるなど消極的な態度に繋がっていると推察される。

また、現実生活での居場所のなさはTwitter上での所属感獲得とは抑制的に結びついていた。このことから、現実生活での居場所のなさを感じるほど、消極的な対人関係という一貫した態度によって、Twitter上でも親密な対人関係が形成されないことが示された。結果、Twitterの利用によって現実生活における社会性の低下というネガティブな方向に増幅されやすいと推察される。

また、本研究では「没入・依存的関与」の高さがTwitter上での行動すべてに影響を与えていることが示された。「攻撃的投稿」を介して現実生活での社会性の「感情・欲求抑制」に、「関係の拒否」を介して「自己主張」に抑制的に影響する。さらにそれだけではなく、「所属感獲得」を介して「円滑な対人関係」や「自己主張」に促進的に影響していることが示された。

「没入・依存的関与」はTwitterへ深く没入したり、強く依存したりすることを示している。とは言え、本研究の調査協力者のTwitterへの没入・依存の程度は高くない傾向にあることは考慮しなければならない。本研究の調査協力者は大学生および社会人から構成されていることを考えると、日常生活が損なわれるような病的もしくは重度の没入・依存傾向にある者は含まれていないと言えるだろう。本研究においての「没入・依存的関与」の高さはTwitterへの重度の没入・依存を示すものではなく、Twitterが生活の一部として根付いているか否かを表していると考えるべきである。そのため、「没入・依存的関与」は社会性の低さとは直接結びつかず、Twitter上での行動内容を媒介して社会性に促進的にも抑制的にも結びついているのだろう。

次に本研究では仮説2としてTwitter上での向社会的行動が現実生活での社会性の向上に影響するという仮説を立てたが、仮説は支持されなかった。Twitter上での向社会的行動が現実生活における社会性に影響しない理由として、Twitterの仕様による要因が考えられる。Twitterでは他者からの評価が見えやすいという特徴がある。この特徴からTwitter上での向社会的行動は共感など利他的な動機のみではなく、周囲からの良い評価という潜在的報酬による利己的な動機からも行われていると言える（Wallace, 2016)。つまり利己的な動機から向社会的行動を取る者は評価が得られる

Twitter上では向社会的行動を行っても、現実社会では評価が見えにくく報酬とならないため、Twitter上と同程度には向社会的行動を行わないのだろう。環境要因の差からTwitter上での向社会的行動は現実社会における社会性には影響しなかったと推察される。

さらにTwitter上での攻撃行動が現実生活での社会性に与える影響については、「攻撃的投稿」が「感情・欲求抑制」に抑制的に影響し、「関係の拒否」が「自己主張」に抑制的に影響することが示された。現実社会で攻撃行動を行えば自身の対人関係への悪影響や他者からの批判など社会的制裁が生じる可能性があるが、Twitter上では匿名であるため他者への攻撃を行ってもそれらのペナルティおよびデメリットが生じにくい。そのため、ちょっとした不快感情であってもフラストレーションを貯めることなく攻撃行動として発散することができる。こうした行為はストレスの発散としての効果を持つが、自己コントロールの低さを増幅させ社会性の抑制へと影響すると考えられる。

「攻撃的投稿」が直接的な攻撃行動であるのに対し「関係の拒否」はTwitter等オンライン上での対人交流ならではの攻撃行動である。Twitter等オンライン上では即座に関係を断つことが可能でありTwitter上で形成された消極的で希薄な対人関係のスタイルは、現実生活における対人場面においても適応されると推察される。

Twitterでは同一ユーザーが複数のアカウントを作成することが出来、交流しているコミュニティや利用用途別にアカウントを使い分けることが出来るため、相手やその時の気分によってアカウントを変え、別人になることで好きなようにふるまうことが可能である。このことから、Twitter上で対人行動を取る利用者は一貫した対人態度を持たない可能性が考えられる。こうしたTwitter上での自己中心的といえる行動や態度が現実生活での社会性を低減させる要因となるのだろう。

所属感と社会性の関連については、Twitter上での所属感を獲得することが現実生活における社会性に促進的な影響をもたらすことが示された。これは藤・吉田（2009）を支持するものであり、オンライン上での親密な対人関係が対人スキルの学習につながる側面を持っていることを改めて示すこととなった。オンライン上での所属感の獲得について三浦他（2009）が指摘しているように、共通の趣味や関心などを持つ者との接触は所属感を感じさせ、親密な関係の構築に繋がっている。また、本研究ではTwitter上での「所属感獲得」と「向社会的行動」との正の相関が示された。これは向社会的行動を他人との気持ちのつながりを強めたり、それをより望ましいものにしたりしようとする場合にとられる行動とし、向社会的行動が深いつながりを持つ人間関係を構築・維持するという菊池（1998）の主張と整合的である。Twitter上での所属感の獲得は対人交流および親密な対人関係の構築からなっており、オンライン上での経験であっても現実社会における対人関係に適応できるのだと推察される。

以上をふまえ本研究の結果からはTwitter上での対人関係であっても希薄な対人関係や対人接触を避ける消極的な態度は社会性を低下させ、逆に親密な対人関係の形成は現実生活においても適応可能な経験となって社会性を向上させると推察される。Twitterの利用はKrautら（2002）のRGR modelが示すような増幅的な影響を持つと言えるだろう。

インターネットで行われる対人交流もごく当たり前のものとして生活に根付いている社会の中で本研究の知見が、インターネットを活かしより良い効果を得る方策を探る一助となれば幸いである。しかしながら課題点も多い。本研究はTwitterの利用に絞った検討であり、オンライン上でのコミュニケーション全般に当てはまるものではない。また、調査協力者が大学生および社会人であり、社会に適応している限られた人々から構成されているため、重度の依存傾向にある者の検討はできていない。Twitter利用による社会性の変化については自己報告を求めたのみであり、進学・就労、その他様々な要因が関連していると考えられ、因果的効果が確認されたわけではない。あくまでもRGR modelを基にTwitter上での向社会的行動および攻撃行動が社会性に与える影響について一つのモデルを示したのみであり、さらなる検証を行う必要があるだろう。

## 付　記

本論文は、第一著者が昭和女子大学大学院生活機構研究科に提出した修士論文（2020年度）を再構成したものである。

## 謝　辞

本論文を作成するにあたり、調査に協力してくださった皆様に深く感謝致します。

## 注

1）現在ではXと名称が変更されているが本論文では執筆時での名称であるTwitterを使用する。

## 引用文献

藤　桂・吉田富二雄（2009）.インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響：ウェブログ・オンラインゲームの検討より　社会心理学研究，*25*（2），121-132.

原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和（2008）．社会的自己制御（Social Self-Regulation）尺度の作成―妥当性の検討および行動抑制/行動接近システム・実行注意制御との関連　パーソナリティ研究，*17*（1），82-94.

五十嵐祐（2002）．CMCの社会的ネットワークを介した社会的スキルと孤独感との関連性　社会心理学研究，17（2），97- 108.

磯部美良・菱沼祐紀（2007）．大学生における攻撃性と対人情報処理の関連―印象形成の観点から　パーソナリティ研究，*15*（3），290-300.

菊池章夫（1988）．思いやりを科学する―向社会的行動の心理とスキル　川島書店

Krahé, B. (2001). *The Social Psychology of Aggression*. East Sussex. UK: Psychology Press.（秦一士・湯川進太郎（訳）（2004）．攻撃の心理学　北大路書房）

Kraut, R., Kiesler, S., Boneva, B., Cummings, J., Helgeson, V., & Crawford, A. (2002). Internet paradox revisited. *Jouna1 of Sociat Issues*, *58*, 49-74.

工藤力・西川正之（1983）．孤独感に関する研究（Ⅰ）―孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討―　実験社会心理学研究，*22*（2），99-108.

Martin, L, Hoffman. (1975). Developmental synthesis of affect and cognition and its implications for altruistic motivation. *Developmental Psychology, 11*, 607-622.

三浦麻子・森尾博昭・川浦康至（2009）．インターネット心理学のフロンティア―個人・集団・社会　誠信書房

宮田加久子（2005）．きずなをつなぐメディア―ネット時代の社会関係資本―　NTT出版

坂元　章・磯貝奈津子・木村文香・塚本久仁佳・春日　喬・坂元　昴（2000）．社会性訓練ツールとしてのインターネット：女子大学生のシャイネス傾向者に対する実験　日本教育工学雑誌，*24*，153-160.

佐藤広英・吉田富二雄（2008）．インターネット上における自己開示―自己―他者の匿名性の観点からの検討―　心理学研究，*78*（6），559-566.

島本好平・石井源信（2006）．大学生における日常生活スキル尺度の開発　教育心理学研究，*54*（2），211-221.

総務省（2017）．平成29年版情報通信白書ICT白書 <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/index.html> Accessed 2020-1-22

総務省（2018a）．平成30年版情報通信白書ICT白書 <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/pdf/index.html> Accessed 2020-1-22

総務省（2018b）．ICTによるインクルージョンの実現に関する調査研究 <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/linkdata/h30_03_houkoku.pdf> Accessed 2020-1-22

鈴木隆子（1992）．向社会的行動に影響する諸要因―共感性・社会的スキル・外向性―　実験社会心理学研究，*32*，71-84.

高比良美詠子・安藤玲子・坂元章（2006）．縦断的調査による因果関係の推定―インターネット使用と攻撃性の関係―　パーソナリティ研究，*15*，87-102.

Wallace, P. (2016). *The Psychology of the Internet*

(2nd.ED.). Cambridge University Press.（パトリシア・ウォレス.川浦康至・和田正人・堀正（訳）(2018). 新版　インターネットの心理学　NTT出版）

たかだて　ななみ（汐田総合病院）
たなか　なおこ（昭和女子大学）